

はじめに

これからみなさんに読んでいただくと思うのは、近現代日本の「通史」です。

「通史」とは、歴史の流れを時間的な順序に沿いながら、政治や社会の出来事を行きわたるだけ幅広く叙述する歴史の描き方です。中学校や高等学校の歴史教科書が「通史」となっています。

そもそも歴史を叙述するとは、無数の出来事から、重要な出来事を選び出し、出来事同士を結びつけて解釈し、それに意味を与え、批評するという営みです。その「重要な」といったときの基準、意味を与えるときの尺度をできるだけ幅広くとるのが「通史」ということとなります。したがって、これまでの「通史」の多くは国家としての日本が辿^たってきた道筋として「通」を設定し、しばしば、国家の制度や法律、また外交上の動きや内閣の政治を辿り、「通」としてきました。

それに対し本書では、「通」に当たるものを、システムとそのもとでの人びとの経験としたいと思います。システムというのは、ここでは人と人とのつながりをつくり出す動きであり、かつ人と人とのつながりがつくり出す関係の総体であると定義しておきましょう。人びとの経験こそが、歴史のなかでもっとも重要なものですが、人びとはバラバラに孤立して生活しているではありません。家族を営み、地域で暮らし、社会をつくりあげています。こうしたなかで、そのシステムの推移を追ってみたいということです。

なにやら難しそうですが、歴史の流れを一つのまとまりとして説明しようということですね。歴史を動かすのは人に他なりません、人の動きが一つの流れ——人間関係から社会の仕組みまでをつくり出していく、その流れを一つのまとまりとして捉えてシステムと呼び、それを「通」として、近現代日本の動きを見たいと思います。

やっかいなことは、いったん動き出したシステムは人の手を離れればしばしば思いもかけぬ方向に向かうことです。人びとはシステムをつくり出しつつ、システムに巻き込まれ、自らの思惑とは異なる事態に直面してしまうのです。歴史が不条理である、というのはこうしたことによつています。

別の観点から説明してみましよう。歴史とは、よくいわれるように過去と対話し（いま）を考え、未来を探る営みですが、そのゆえに（いま）の認識が異なってくることによって、「通」の内容が変わってきます。「通史」といったとき、私は大きく（一九五〇—七〇年代に提供された）「戦後歴史学」の通史、（一九七〇—八〇年代に提供された）「民衆史研究」の通史という推移があり、現在に至っていると思っております（成田龍一『近現代日本史と歴史学』二〇一二年）、「戦後歴史学」の提供した「通」は、政治制度と社会運動でした。社会の仕組み⇨政治制度と、その批判・対抗としての社会運動への着目です。これに対し、「民衆史研究」は、（「公」に対する）「私」、（政治に対する）生活、（歴史をつくり出す側に対する）歴史に巻き込まれていく人びとを「通」としていきました。それに対し、（いま）はシステムを「通」として考えることが有効であるというのが本書の立場です。

「戦後歴史学」や「民衆史研究」の時期は、冷戦体制のさなかであり、システムは安定していたため、社会構造やその仕組み、さらにシステムへの抵抗に関心が寄せられていました。それに対し、（いま）は転換期のただなかにあり、システムそのものが大きく変わる

うとしています。そのため、過去——歴史に目を向けるときにも、システムの交代に関心が寄せられることになる、というのが本書での認識です。

システムといったとき、人びとの意思と行動がその基底にあることは、繰り返し強調しておきたいことです。一人ひとりの思いと願いが、システムをつくりあげ歴史を動かしていきます。これは、歴史が、人びとの営みによって動かされつくられているということに他なりません。

しかし、人びとといっても、決して一律な存在ではなく多様であり、また人びとは多面的に動きます。さまざまな人びとによる、さまざまな営み。歴史における人びとの営みは、一つの方向ではなく、多様な方向に向いており、それゆえに人びとの合力は、思いもかけぬ方向に働きます。一人ひとりの思いがあり、それが歴史を進めていくのですが、その経過を一人ひとりの思いに照らし合わせてみたときには、歴史はしばしばその思いとは異なつた方向に向かい、予期せぬ運命をもたらします。そう、歴史の不条理です。

〈いま〉の時代は、「私」の決断が求められるとともに、その結果が、「私」の決断から離

れていつてしまうことが同時に生じています。一人ひとりの思いに着目することと、それが集合化したときに生じる歴史の不条理への着目——この双方を把握するために、システムに目を向けるということになります。近現代日本の歴史を、こうしたシステムの形成とその仕組みから描き、さらにそのシステムのもとでの人びとの経験とその意味を考えてみたいと思います。

加えて、いまひとつ。本書でシステムに着目するのは、これまでの「通史」が、アイデンティティの確認を大きな目的としてきたことに対する反省があります。これまでの「通史」は、「日本」はどのようにしてここまで来たのか、ということに力点があり、近現代日本の「形成」——「展開」を経て〈いま〉に至るものとして歴史が描かれてきました。「近現代」を一つのシステムとして把握し、その一つのシステムの形成——展開が語られることにより、〈いま〉に至る来歴がアイデンティティの確認と重ね合わされ、論じられてきました。

しかし、本書では〈いま〉に至る複数のシステムを視野に入れ、複数のシステムの交代

として近現代日本の歴史を把握し、〈いま〉がシステムの切れ目であること——転換期としての〈いま〉を認識するために「通史」を提供したいと思っています。二一世紀初めの〈いま〉こそが、近現代の時間の幅での日本と世界の転換期であるということを知るための「通史」です。そのために、システムの転換と推移として、一五〇年間の近現代日本の歴史を説明してみたいと思います。「日本」と「世界」はいま、それほど大きな変化のなかにあり、システムの交代の時期にあるなかでの「通史」ということになります。

グローバル・ヒストリーをはじめとして、さまざまな世界史の見方が提供され、高等学校で「歴史総合」の科目が新設されるなど歴史教育が大きく転換しようとしているのも、こうした認識と連動していることでしょう。いや、それにとどまらず、ビジネス書においても、現在を理解するために歴史的な射程が有効であることが主張されています。

たとえば『週刊東洋経済』（二〇一六年六月一八日、八月一三日—二〇日、一二月二四日）は、三号にわたって歴史を特集し（それぞれ「ビジネスマンのための学び直し日本史」「ビジネスマンのための世界史」「ビジネスマンのための近現代史」というタイトルが付されています）、その知

識と考え方を提供しています。この特集では、参考文献などもあわせ、近年の成果が多く取りあげられています。

そうしたなか、私なりの試みとして、近現代日本史を複数のシステムの交代として把握し、それぞれのシステムの形成とそれに伴う社会の編成（構成と構造）、そしてそのもとでの人びとのありようを、本書で探ってみたいと思います。

近現代日本史といったとき、一九世紀半ば以降の時期が対象となりますが、三つのシステムが見出みいだされます。私はそれらにシステムA、システムB、システムCと名付けてみました。システムAは「近代」、システムBは「現代」といい習わされてきた時期とその動きに当たり、システムCは「現在」です。

システムAは、近代国家ができあがり、日本がそのかたちを整えていき、システムBは、それを前提に日本が政治的・経済的な帝国主義国として膨張していく動きをつくり出します。そしてシステムCは、その後の現在の動きを規定しています。

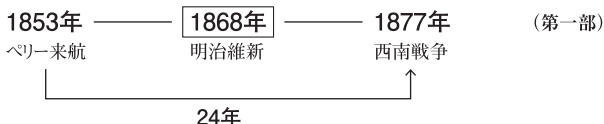
システムAは、一九世紀後半から二〇世紀初め（明治期から大正期）に当たり、二〇世紀

前後を境にシステムA IとシステムA IIとに分節されます。そのあとのシステムBは、総力戦の時代（システムB I）と高度成長の時代（システムB II）とに二分され、さらに、システムCへ転換し、いまやあらたなシステムC II（あるいは、システムD）へ移行しつつあるということになります。

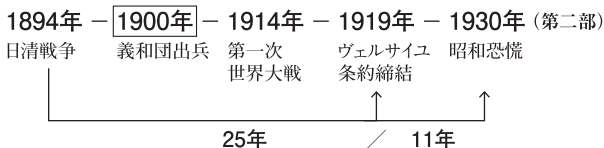
システムは、ある出来事をきっかけに始動して方向性をつくり出し、大きなうねりとなって人びとを巻き込み、社会を編成します。はじまり―制度化―区切り目という流れでシステムがかたちづくられ、一つのシステムはおおよそ二五年の期間持続します。同時に、社会は編成されたその瞬間にさらなる変化を始めています。システムによる歴史の把握といったとき、社会の編成―再編成の繰り返しとなり、私たちが知っている個々の出来事も、そうしたなかで生起します。

本書の構成と重ね合わせながら、あらかじめ簡単にシステムの推移を説明すると、システムA Iは、ペリーの来航（一八五三年）によって始動し、それをきっかけとする動きのなか江戸幕府が倒壊し、明治政府ができあがり（一八六八年）。この動きは、西南戦争（一八七七年）によって、いったん区切りがつけられますが、このシステムA Iの形成に伴

【システムAIの形成】



【システムAⅡの形成】

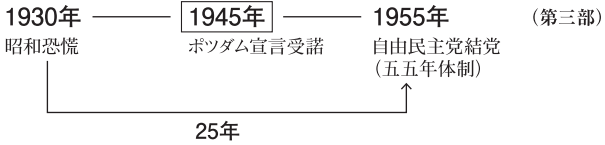


って「近代」日本が作り出されます。

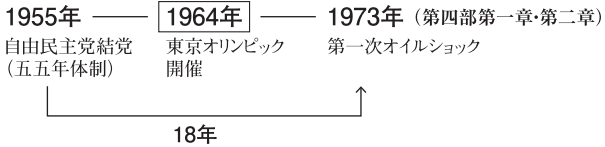
システムAⅠは、国民国家の形成として、民主主義、生産力（＝資本主義）、ナショナリズム、そして個人の誕生などをその内容とします。その後、二〇世紀となる前後に、システムAⅡが帝国主義として立ち現れてきます。植民地を有した帝国主義国としての日本であり、一九〇〇年ごろを中心とするその動きは、日清戦争・日露戦争、そして第一次世界大戦となって現れてきます。

しかし、世界恐慌——昭和恐慌（一九二九—三二年）のもとであらたな対応を迫られ、システムBⅠが始動します。大量生産・大量消費により、「近代」を前提としながら展開し、「現代」となっていくます。統制と動員が図られ、総力戦に伴ってあらたなシステムが

【システムBIの形成】



【システムBIIの形成】

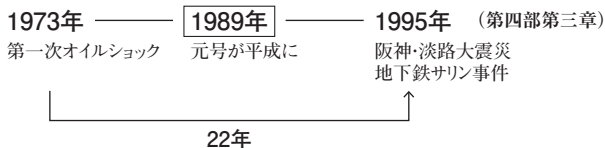


始まり、敗戦（一九四五年）、さらに占領という事態となります。人びとの自発性を引き出しながら動員を行うシステムですが、それが統制をもたらし、社会の再編成を伴いました。

システムBIによる統制は、その極限として「全体主義」に至りますが、全体主義が、国民国家の解体によるのか、国民国家の徹底によるのかは、論点となるところです。このシステムBIは、総動員体制を持続させながら、生活世界を拠点にしてシステムの変容を生み出します。経済成長を目標とした動員体制であるシステムBIIです。

システムBIIは、「現代」における、高度経済成長のもとでの生活革命の過程ということができません。高度経済成長とそれに見合う政治体制（「五五年体

【システムCIの形成】



【システムCII(システムD)】



制」、世界的には冷戦体制)のもとでのシステムで、一つの頂点として東京オリンピックの開催(一九六四年)を迎えますが、第一次オイルショックの到来(一九七三年)により、拡大・膨張の時代は終わります。

オイルショックのあと、大量生産—大量消費のシステムは維持できなくなります。グローバリゼーションの流れと重なり合いながら、さらなるシステムCIが動き出します。

きっかけはオイルショックですが、冷戦体制とその後
の国際関係——東西対立と南北対立から、市場経済の
大と民族紛争の多発へと、システムCIはあらたな事態
を伴います。新自由主義を基調とし、「大きな政府」か
ら「小さな政府」、「重厚長大」から「軽薄短小」など、

拡大ではなく縮小をもつぱらとするシステムです。「戦後」(＝冷戦体制)の終焉しゆうえん、すなわち「戦後」後」＝冷戦体制後に、より動きが鮮明に見えてきていますが、自己責任を声高に強調し、情報手段などの大きな変化を伴っています。

そして、そのシステムCⅠが、一九九五年をきっかけとして、いまやあらたな局面に入っているとします。進行しつつある変化であり、なかなか自覚しにくいのですが、この時期以降、これまでのシステムでは対応できない事態が生じています——外部の喪失を強調し、歴史の反復ではなく歴史そのものを消去し、これまでの人びとの知恵や知識が通用しないような動きであり、数値化と効率化が一挙に進行する事態。グローバル化のシジョンのもとで、さらなる展開が見られるということです。

この事態が、システムCⅠの延長として把握できるCⅡであるか、あるいは異なったシステムDであるかは、まだ判断が付きません。しかし、システムがあらたな変化を見せていることは明らかでしょう。

複数のシステムの交代として近現代日本史を把握するとき、こうした大きな流れが浮上します。本書では、システムの推移をできるだけ具体的に、かつ歴史的に述べていくことに

しましよ。

叙述にあたっては、①国際関係―②国内政治と経済―③社会と文化の三層構造に目を向け、できるだけ時系列で問題史的に扱うということを中心掛けた。「国際関係」(植民地を含む)―「政治体制」―「(社会運動を含む)社会の形成と民衆世界」(規範と規律の観点から)という領域を組み合わせて描くということです。

同時に、システムは世界的な規模の動きであることも忘れるわけにはいきません。そもそも「近代」「現代」「現在」という時代・時期は、人びとの集団を線引きして、「われわれ」／「かれら」という区分の認識のもとに作動していますが、その線引きの力学がシステムということになります。

「近代」をつくり出すときの線引き(＝「われわれ」／「かれら」)は、「文明」に対する「野蛮」と「未開」という弁別です。「外部」の排除／「内部」の差異化ということが、時間的順序なのか、あるいは型であるのかということとは論点となっていますが、植民地という「他者」(＝「かれら」)にも、「野蛮」「未開」という視線が投げかけられます。また

「現代」の線引きは、さらにナショナリズムと階級、帝国主義国（一等国）と植民地などが入り込み、「われわれ」／「かれら」の線引きは、自由主義陣営と社会主義陣営、「先進国」と「後進国」などというように、人びとの集団を分断していきます。

「現在」はあらたに再編がなされ、多様な文明を認知しつつ、それらの個別性以上に、多様性を通じての統合が図られます。大文字の「かれら」という観念は、ここに至っても手放されていません。なるほど多文化主義では、あらかじめ想定された「かれら」は存在せず、「われわれ」との関係で相関的に「かれら」が認定されるとしますが、それでもこの区分はいまだに残されています。

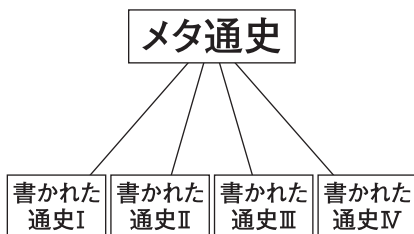
ここで留意すべきは、システムにおいて生み出される「かれら」が、「われわれ」のアイデンティティを確かめ強化するためのものであるということです。システム外に立つ「他者」への想像力を欠いているということであり、こうした「他者」をシステムは消去してしまいます。

このような世界規模でのシステムが、日本という地域で作動していくことが、近現代日本史なのです。正確にいうと、この過程で「日本」というまとまりがなくなり出され、近現

代日本史が動き出します。

本書はこうした認識と方法によって「通史」を描きますが、さきに強調したようにシステムといっても、それをつくり出し作動させるのは人です。人が営む出来事によって関係性を束ね、ある方向性をつくり出すとき、それがシステムとなります。しかし、いったんシステムが動き出したとき、そのシステムに乗り、システムに棹さおさす人びとが現れる一方、多くの人びとはシステムに翻弄ほんろうされていきます。

そうであればこそ、システムを歴史的に理解するのはとても大切なことになります。システムは人びとの前に選択肢を差し出しますが、笑いかけ、やさしい顔をしながら、破綻を持ち込んでくることがしばしば見られました。人びとの側からすれば、よかれと思った選択が破綻をもたらすのです。したがって、本書では、(出来事の)当時の人びとにとっての意味を探り、そのことを明らかにしながら(いま)における意味づけを行います。叙述としては、システムに抗した人をはじめ、できるだけ個の世界、個の経験も取りあげることを試みます。



歴史を描く方法として、出来事の説明―解釈―批評を行うということが、歴史教育の展開として小川幸司『世界史との対話』（上・中・下巻、二〇一―二二年）によって営まれています。本書は時間も地域も限定されていますが、それに倣うものです。近現代日本史が対象とする時期は、「近代」「現代」（あるいは「近現代」といわれ、また、「明治」「大正」「昭和」「平成」とも呼ばれてきた時代ですが（もつとも、このごろは教科書でも西暦重視になっています）、あらためて本書の区分も提供したいと思います。

いくら抽象的でない方になります。私たちがそれぞれに世界と日本の歴史の流れを意識し、歴史認識を有しています。それを「メタ通史」と呼んでみましょう。これまでの「通史」もあらためて考えれば、「メタ通史」をそれぞれの問題意識によって、そのときどきに記したものであるということができるでしょう。本書も同様に、その「メタ通史」を、私なりの〈いま〉の問題意識によって描き出してみようという試みで

構成

【近代】

システムAI: 第一部／国民国家の形成

システムAII: 第二部／帝国主義への展開

【現代】

システムBI: 第三部／恐慌と戦争

(戦争への動員体制＝総力戦体制)

システムBII: 第四部／第一章／サンフランシスコ体制

第二章／経済大国と「六八年」の運動

(経済への動員体制＝冷戦体制)

【現在】

システムCI: 第四部第三章／一九八〇年代の日本

(新自由主義の始まり)

システムCII(システムD): 第五部／〈いま〉の光景

す。これまでの「通史」が提供してきた出来事や人物、制度や思想を組み替える営みであり、これまでの「通史」への上書きということになります(図)。そして、いくらか力んでいえば、「歴史の危機」に対する紙つぶてに他なりません。

なお、本書の執筆に当たり、多くの先行の研究を参照させていただきました。「通史」という体裁上、すべての典拠を記すことができませんでした。ご了承ください。

また、太陰太陽暦が太陽暦に切り替わるまで(明治五(一八七二)年一月二日)は、西暦の年―太陰太陽暦の月日という表記と

なっています。さらに地名も原則としてその当時の呼び方に従いました。現在は使用されない「満州」（中国東北部）も「」なしで使用しています。また、引用文献に關しましては、今日の人権意識に照らして不適切と思われる表現についても資料的意義を鑑み修正を行っていません。